





海外対談は事前に収録し、有楽町朝日ホールにて上映。その後、日本側の知識人らによるパネル討論を設定し、参加者の皆さんに世界の一步先の姿を「自分事」として考えていただこうと試みました。こうしたセッションは朝日新書の形にまとめられ、反響を呼びました。

登壇した方々は、国内外の識者や企業関係者、NPO関係者ら計登壇者数は計101人（前回63人、前々回96人）となり、このうち女性は49人。男女比は51:49でした。一方、オンライン配信の事前登録者数は約6,300人でした。会場でのリアル参加は3日間のべで650人強となりました。

4日間の開催期間中、気候変動や環境、SDGs（国連の持続可能な開発目標）を取り上げたセッションも多く配信しました。

パネル討論「地球沸騰?! ~1.5度上昇の世界 私たちはどう生きるか」は国連事務総長が危機感をあらわに訴えた「地球沸騰」の深刻さと、パリ協定の目標達成が非常に厳しくなっている状況から企画。気温上昇が不可避なら、その後の世界はどうなるのか——。倫理や哲学からのアプローチも意識しました。

江守正多さん（東大教授）は、温暖化の厳しい現状についての科学的な最新報告とともに、「1.5度を超えても1.6度で止めるといった『諦めない』ことが重要だ」と指摘。経済・社会思想が専門の斎藤幸平さん（東大准教授）は「脱酸素を実現するなら脱成長にかじを切るしかない」と訴えました。環境活動家の大学生中村涼夏さんは温暖化に責任のない途上国や若い世代が被害を受けることで「エコ不安症になった」と打ち明けながらも、「脱成長に一筋の光を見た思いです」と語りました。



パネル討論「里山~自然と文化の交差点 持続可能なくらしとは」は、環境保全や生物多様性、循環型社会の観点から「里山」を改めて評価し、保護と展望を考えました。冒頭で、司会者が「国連のSDGsの理念に里山の機能は適合している。世界が求めている価値が里山にはある」と言い切る一幕も。

ルーマニア出身の佐々木リディアさん（東京都立大准教授）は、人が保全する里山は介入のない場合と比べて生物多様性が豊かになることを紹介。さらに女性や外国人といった担い手の多様化が里山の持続につながると訴えました。

神戸市長の久元喜造さんは「こうべ再生リン」プロジェクトについて説明。下水

汚泥からリンを抽出して肥料として販売する循環型事業で、規模も大きく食料自給率の向上に寄与するメリットもあり、参加者アンケートからも関心度の高さがうかがえました。

パネル討論「地球の未来を守る 気候変動対策のために」が目指したのは、視聴した一人ひとりが気候変動の影響を身近に感じ、できる対策を考えることです。猛暑で熱中症の搬送者数が激増していることや、災害が激甚化、広範囲化していることを紹介。気候変動によって個人の健康が脅かされている危機感を共有しました。

客席とステージの登壇者で一体となって考えようと、色つきのカードを参加者に上げてもらう会場アンケートを実施。自宅での太陽光発電の導入や断熱窓の採用の有無などを尋ねると、会場の環境意識の高さが伝わってきました。パネリストの島村琢哉さん（旭硝子財団理事長）は、財団が実施し、有識者らに地球環境の深刻さを時刻で表してもらう「環境危機時計」の2023年の結果を紹介。最も深刻な場合を12時とすると、2023年は9時31分でした。

客席に地球環境への危機意識を4段階でたずねると、最多は「極めて不安」に。環境省サステナビリティ広報大使を務めるモデルのトラウデン直美さんは「危機意識を持って変えようとしている人が世界で増えている。それが成し遂げられれば少しでもましになっていくと思う」と話しました。

新しいセッションの形を目指したパネル討論「エコハウス『ほくほく』で私たちは考えた 足もとの行動から世界を変える」は開催8カ月前の2月に始動。コーディネーターを務めた文化部be編集部記者の斎藤健一郎さんが八ヶ岳のふもとに建てたエコハウス「ほくほく」を舞台に、大学生たちが脱炭素社会の実現方法を探るプロジェクトです。



千葉商科大や名古屋市立大などの学生10人が、「ほくほく」でのフィールドワークや、大学の教室断熱化ワークショップなどを通じて感じたことを発表し、プロジェクト継続の決意を語りました。

パネル討論「地球に異変 行動したい、でもどうすれば!？」は、地球環境問題の解決のために行動したい人の参考になるよう、長年にわたり行動し続けている3人をパネリストに迎え、どう壁を乗り越えてきたか、どうすれば問題意識を持つ人が一歩を踏み出し、活動を広げていけるかを話し合いました。

フェアトレードカンパニー社長のジェームズ・ミニーさんは、心が満たされるような消費活動を提案し「同じように無力感を感じている人はたくさんいる。みんな

で踏み出してほしい」と呼びかけました。環境分野のノーベル賞とも言われる「ゴールドマン環境賞」を受賞した、一般社団法人「Climate Integrate」代表理事の平田仁子さんは「自分の行動が、次の仕組みの何を変えるか。想像して一歩踏み出すと、達成感も感じながら踏み出せるのでは」。植樹活動に取り組んで10年目の歌舞伎俳優、市川團十郎さんは、どう行動すればいいか悩む人に「同じ意思を持っている人と仲間になる。自分だけでなく未来の子ども、孫、世界の未来のために諦めないこと」とアドバイス。平田さんから「仕事のなかでも、できることを」と投げかけられると、「歌舞伎と環境問題、頑張ります」と締めくくりました。

コロナ禍を経て世界規模で経済活動が活発化し、旅行などグローバル規模での人々の往来も本格的に復活する中、自然破壊や環境汚染への関心が高まっていると受け止めています。次世代へ繋ぐ未来をより明るい姿にしていくためにも、朝日地球会議は今後も環境関連のテーマを積極的に取り上げいきます。